

目次

卷頭言

名語記の口頭語について

小林 芳規……………一

和化漢文に於ける形式名詞の新生と分化について

鈴木 恵……………二九

天理本『日本往生極樂記』の訓法に就いて

宇都宮啓吾……………五

——文章の性格から観た和化漢文訓点資料の訓法に関する一考察——

平安・鎌倉時代における「現ス」「アラハス」「アラハル」についての一考察

柚木 靖史……………六

和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

土居裕美子……………一〇二

——類義語の意味関係変化の一類型として——

『西方指南抄』『三帖和讃』における親鸞聖人の漢字字体の特徴について

藤田 夏紀……………一三四

——部首に注目して——

恵信尼写『仮名書き無量寿經』翻刻並びに对照本文漢字索引稿

佐々木 勇……………一三六

比治山女子短期大学日本語史研究会

前田育徳会  
尊経閣文庫蔵『日本往生極樂記』解説並びに影印

宇都宮啓吾……………一三三

# 名語記の口頭語について

小 林 芳 規

## 目次

- 一、はじめに
- 二、名語記の文体
- 三、引用部分に見られる用語の記述
- 四、説明文の中に現れた口頭語

## 一、はじめに

日本語の歴史を叙述し説明するに当り、文献に記録された言語が第一次の基本資料となることは言うまでもない。しかし、それが過去の言語の一部に過ぎないのも事実である。文献に記録されなかった言語の中には、過去の文献の残存することの少ない辺陲の地の方言の如く、その過去の言語体系の全容が殆ど欠落しているものもある。

ここに「口頭語」というのは、日常の話し言葉を指し、それ自体が体系を持つ言語である。本質的には音声を媒介とする言葉であるが、過去の言語を資料とする日本語の歴史において、文献資料に基づいてこれを対象とする時には、文字として書き止められたものとなる。それは、「話し言葉」が本質的には音声を媒介とする言語であるが、研究対象としてはそれだけでなく文字化されたものも含み一種の文体として把える立場に通ずる。

注

- (1) 拙稿「鎌倉時代語研究の課題」(鎌倉時代語研究第十輯、昭和六十二年五月)。
- (2) 拙稿「鎌倉時代の口頭語の研究資料について」(鎌倉時代語研究第十一輯、昭和六十三年八月)。
- (3) 拙稿「和化漢文における口頭語資料の認定」(鎌倉時代語研究第十二輯、平成元年七月)。
- (4) 小林芳規他編『梁塵秘抄・閑吟集・狂言歌謡』(新日本古典文学大系第五十六卷、岩波書店、平成五年六月刊)の小林執筆解説。
- (5) 注(4)文献に附載。
- (6) 岡田希雄「鎌倉期の語原辞書名語記十帖に就いて」『名語記所見の鎌倉時代語』(勉誠社刊「名語記」附載論文)。
- (7) ここに引用の「トイヘル」は、言葉の口にするが、世間で話しているの意の場合である。この意味で用いた「ト申ス」等も含めた。名語記には、他に「コレハタメニイフ心」(巻二、二八オ)のように、提示された事柄をとりたて述べる、形式化した用法があるが、この用法のものは取上げていない。
- (8) 注(4)文献。
- (9) 例えば、
  - 人躰ノクヒノト如何 ノトハ喉トツクレリ 飲戸ノ義歟 クハシクハノム戸トイフヘキ歟(巻五、一四オ)
  - ミスラ マキアケテモタスル物ヲコトナツク如何 御簾ノコハ鈎也 コウトイフヘキラコトイヘル也(巻二、四九ウ)
 の如く、院政鎌倉時代には、「ノムト」は古辞書や訓点資料に見られる文章語であるのに対して、「ノト」は角筆文献など口頭語資料に見られる。又、「鈎」の音は字音仮名遣では「コウ」であるが、口頭語では「コ」とオ段長音の短呼が行われている(音韻(漢字音)の項参照)。次の例も同種である。
  - 下臈ノ「キト」、イフヘキラ「スト」、イヘル如何(巻六、九八オ)
- (10) 佐藤喜代治「文章研究の意義と方法」(国語学第二十五輯、昭和三十一年七月)。
- (11) 拙著『角筆文献の国語学的研究』研究篇七七四頁以下。
- (12) 高松政雄「オ段拗長音の一問題」(国語学八十三集、昭和四十五年十二月)。
- (13) 吉田金彦「口語的表現の語彙「一かす」」(国語国文二十八巻四号)。

## 和化漢文に於ける形式名詞の新生と分化について

鈴木 恵

### 目次

- 一、はじめに
- 二、形式名詞の分類
- 三、形式名詞の実例——『真福寺本将門記』を資料として——
- 四、形式名詞の新生と分化
  - I、形式名詞の通時的検討
  - II、『平安遺文』による時期の推定
- 五、むすび

### 一、はじめに

松下大三郎博士の提唱とされる形式名詞は、一般に「実質的意義を欠き、形式的意義のみを持っていて、常に実質的意義を補足する修飾語句を伴って用いられる体言」、「連体的なかざりなしでは成立せず、実質的な意味を失って、カテゴリー的な意味が前面に現れているような、文法化した名詞」(何れも『国語学大辞典』東京堂)、「名詞のうちの特殊な一類で、意味が抽象的・形式的になっていて、独立しては使われず、具体的・実質的な意味を補う修飾語を伴って使われ

和化漢文に於ける形式名詞の新生と分化について